



古市公威の偉さ

6

金 関 義 則

一九一二年に明治は大正と改元された。ときに古市公威は満五八歳であり、数えて五九歳で、やがて六〇歳になろうとしていた。明治という時代は終わった。あわただしく過ぎ去った歳月を振りかえりながら、それは長い長い旅路のように思われた。そのときどきに、これからどうなるかを案じつつ歩いたが、めまぐるしく移ろい交って、予想はしばしば裏切られるのであった。石本新六とともに明治三年（一八七〇年）に姫路藩の貢進生に選ばれて大学南校で学ぶことになったとき、二人はそれほど違った考えをもつてはいなかった。仏語生徒として古市は石本と首席をきそい、他藩出身の秀才を圧倒していた。ところが六年になると石本は幼年学校に転じ、一年に士官生徒第一期生（旧一期）として卒業した。卒業と同時に工兵少尉となり、一二年から一五年にかけてフラ

ンス留学して、サンシールの砲工学校を卒業している。西南戦争に従軍しており、工兵将校として先頭に立って果進し三一年には少将になった。

寺内正毅が三四年に陸軍大臣になると石本は総務長官、陸軍次官に抜擢され（三七年に中将に進級）、四四年八月に寺内が第一代の朝鮮総督になるや石本は陸軍大臣を継いだ。石本ほど長く陸軍の中樞にあって（おかげで日露戦争には従軍せず功二級金鶏勲章をもらっている）実権をにぎりつづけた事例はないであろう。しかしながら石本は大臣となって権勢をふるうまもなく、四五年四月に現職のまま病死した。（石本に代わって陸軍大臣となったのは出世コースからはずれていた上原勇作で、上原も明治五年に大学南校に入った仏語生徒であったが、八年に幼年学校に転じて

工兵将校となり、一四年から一八年にかけてフランスに留学した。石本が大將に進級するのは確実とみられ、山県有朋、桂太郎、寺内正毅につづく四代目の巨頭になれるかも考えていただけに、古市の失望は小さくなかった。ともあれ古市が石本や上原のように陸軍に走らなかつたのは、仏人教師のマイヨが古市の才能をみぬいて強くフランス留学をすすめ、エコール・ポリテクニクやエコール・サントラルのような理工科大学を日本に創設せよとけしかけたからであった。仏語生徒は物理学科しか専攻できなくなり、英語に転科して法学科、工学科、化学科を修めるか、退学して陸軍幼年学校、司法省法学校など仏語を活かせる学校を見つけねばならなかつた。古市は文部省にむかって成績優秀な生徒を選抜して留学させよと迫り、自らのフランス留学を裏現したのであった。大学南校は、開成学校、東京開成学校、東京大学と改名されていったが、古市は仏語生徒として優秀な成績をあげて首席をしめつつただけでなく、全国から集まった秀才中の秀才たちと天下国家を論じてやまなかつた。それらの豪傑のなかでも、斎藤修一郎、小村寿太郎、長谷川芳之助、安東清人とともに古市公威は五人組と呼ばれて畏敬され、そのほかにも杉浦重剛、穂積陳重など多士済々であった。明治八年の第一回文部省留學生に選ばれた英語法学科の鳩山和夫、小村寿太郎、菊池武夫、斎藤修一郎（選抜の成績順）、英語化学科の松井直吉、長谷川芳之助、南部球吾、英語工学科の原口要、平井晴二郎、仏語諸芸学科の古市公威、独

語鉱山学科の安東清人も、また明治九年の第二回文部省留學生に選ばれた英語法学科の穂積陳重、岡村輝彦、向坂兌、英語化学科の杉浦重剛、桜井錠二、英語工学科の関谷清景、増田礼作、谷口直貞、仏語物理学科の山口半六、沖野忠雄も、ほとんどが豪傑であった。これらの秀才は、留学しなければ明治一〇年、一年に東京大学を輝かしい成績で卒業し、同窓会名簿の冒頭を飾ることとなったであろう。

これらの豪傑のなかでも大物が次々と、明治の末期に病没していった。すなわち明治四三年五月に斎藤修一郎（武生藩出身）が、四四年二月に松井直吉（大垣藩）が、四四年一〇月に鳩山和夫（真島藩）が、四四年一月に小村寿太郎（飯肥藩）が、四五年七月に菊池武夫（南部藩）が、その翌月の大正元年八月に長谷川芳之助（唐津藩）が他界したのであった。すでに、明治一九年に安東清人（熊本藩）が早世しており、いわゆる五人組は古市だけが生きのこった。英語法学科で首席を争った鳩山、小村、菊池、斎藤が全て消えて、その後塵を拝した秀才が生きのこった。それぞれ偉業を達成してほしいと、期待していただけに古市は感慨無量であった。独語鉱山学科は明治八年に消滅して、独語生徒は東京大学から卒業生を送りだせなかつただけに、安東清人のみがフライベルク鉱山大学に学んで初心を貫き、文部省で浜尾新を助けて工学教育を担当しながら、三二歳で仆れたことは痛恨の極みであった。

安東に比べれば斎藤、松井、鳩山、小村、菊池、長谷川は、いずれも著しい業績をあげているが、大望を果たせずに仆れた悲運の豪傑もあった。悲惨の筆頭は斎藤修一郎であった。斎藤はアメリカ留学から帰国して、いち早く外務省に入って井上馨（外務卿）の腹心となり、高橋是清から大臣よりも傲慢だと非難されるほど手腕を振るった。アメリカ留学から帰国して司法省に入り裁判所判事となったが不遇不満に悩む小村寿太郎を明治一七年六月に迎え、一九年三月に翻訳局長にすえたのは斎藤であった（そのときの翻訳局長を兼務していたのは取調局長の鳩山和夫である）。それからまた司法省法学校を明治二二年に退学し、郵便報知新聞、大東日報で記者活動をした原敬（南部藩出身）を外務省に迎えたのも斎藤であった。原は井上馨に認められただけでなく、陸奥宗光に重用され、二八年一〇月には外務次官になっている。

その斎藤は明治二二年七月に農商務大臣になった井上馨に招かれて農商務省に移り、商工局長、農務局長を歴任し、後藤象二郎が大臣になると農務次官として存分に手腕を発揮した。ところが取引所設置をめぐる収賄事件で改進黨によって弾劾されて、まづ衆議院議長星亨が失脚し、ついで後藤も斎藤も追いつめられ二七年一月に辞任した。二七年一月に駐韓公使となった井上に拾われて星も斎藤も韓国顧問となる。かつて板垣退助とともに自由党の先頭にたった後藤も時勢に取りのこされ三〇年八月に寂しく病死し、それにひきかえ星は自由党、政友会の実力者にのしか

かり権勢を振るったものの、剛愎と強引がたたって三四年六月に暗殺された。斎藤も中外新報社長、東京米穀取引所理事長などを歴任するが、次々に手がけた事業が失敗して陋巷で窮死したのであった。文部省留学生のうち最初に頭角をあらわし、自由民権をしりぬに専制官僚として局長、次官、大臣の出世コースを疾走しようとした斎藤の最後は、余りにも悲惨であった。

小村寿太郎は父の負債が返却できず債鬼に追われると登序もできないという貧乏ぶりで、大学南校以来の旧友である菊池武夫、杉浦重剛、高橋健三、河上謹一、鳩山和夫の助力によって危機を幾度も救われた。浜尾新の頼みで鳩山が翻訳局長を辞任して、小村が次長から局長に昇進したのは二二年一〇月であったが、その翻訳局長も二六年一月の官制改革で廃官となることになった。林董（外務次官）、原敬（通商局長）なども小村を評価しておらず、その将来は絶望的であった。このとき再起の機会を与えたのは、かねて小村の硬骨を認めていた陸奥宗光（外務大臣）であった。二六年一〇月に公使館参事官として北京在勤を命ぜられ、一月からは臨時代理公使として目を見張る活動が始まった。二九年六月に外務次官となり、三四年九月には桂太郎内閣（第一次）の外務大臣となる。日英同盟の功績で三五年四月に男爵を、日露戦争の功績で四〇年九月に伯爵を、また日露協商、条約改正、日韓併合の功績で四四年四月に侯爵を授けられた。小村を重用したのは桂太郎であり、天皇の信任もあつかった。

小村は体力、氣力を使い果たして五六歳で仆れたが、もし健康に恵まれておれば幾度も外務大臣となり、総理大臣の重責を押しつけられる機会も訪れたであろうと、古市は思うのであった。かつて若くして古市と天下国家を論じたとき、小村は参議の大隈重信をしのいでみせると豪語したが、豪語は見事に実現した。陸奥宗光が仆れたあと、大隈やその心酔者を圧倒する小村外交を展開したからであった。鳩山和夫は明治二五年このかた、衆議院議員選挙に当選し、大隈重信の率いる改進黨、進歩党の幹部となっており、小村にむかつて伊藤博文内閣（第二次）とそれに連携する自由党の軟弱外交を非難して入党をさせた。小村は藩閥も政党も私利私欲に走って国家の将来をまかせられないと語り、いかなる政党にも入る意志はないとわづらした。このとき鳩山はやがて本格的な政党内閣が大隈によって実現され、副総理格の外務大臣として活躍し、大隈の後継者として総裁、総理大臣になることを夢みていたが、小村がすでに大隈、鳩山に対処できる時代は過ぎさっていると判断しているのを読みとれなかつたのである。

小村寿太郎に先立って病没した松井直吉、鳩山和夫については、哀惜もさらに切実なものがあった。明治一三年に海外留学から帰国したとき、欧米から多くのものを学びとらねばならないが、能楽はオペラに匹敵する古典芸能なりとする古市に共鳴して、梅若流にはげんだのが松井と鳩山であった。明治一四年一月に鳩山和夫が松本藩大参事の五女である多賀はる（春子）と結婚したと

き、本邦最初の披露宴なるものに古市は妹のらく（落子）とともに出席し、門出を祝福して仕舞を演じている。春子は女子師範学校（東京女子師範学校、お茶の水女子大学の前身）の第一回卒業生である古市らしく、水野みね（菊池武夫と結婚）と親しかっただけでなく、古市公威の夫人となった川名こゝろ（幸子）、沖野忠雄の夫人となった猪子ふて（筆子）とともに第六回卒業生となっている。鳩山春子は結婚における男女同権を主張し、春子の友人も春子の良妻賢母主義に傾倒していた。

古市は明治三一年に山県有朋に殉じて内務省土木局を去るとき、帝国大学工科大学からも去っていった。鳩山はそれより早く二三年に法科大学を去っている。浜尾新や穂積陳重がしきりに慰留したにもかかわらず、大隈重信に殉じたのであった。大隈が一五年に東京専門学校（早稲田大学の前身）を創設したときから議員、評議員として協力しており、大隈英暦（南部利剛の二男で重信の養子となったが、後に財政問題で離縁となる）、前島密のあとを継いで三年からは第三代校長となった。はじめ東京専門学校は政治経済学科、法律学科、理学科から成り、理学科の修業年限は他が三年であるのに対して四年であった。アメリカで天文学を修得した大隈英暦を助けるため、物理学者の田中館愛橘、生物学者の石川千代松を迎えられたが、理学科は短命に終わった。鳩山は開成学校の英語法学科の生徒として抜群の秀才であっただけでなく、アメリカでも名門の私立大学で優秀な成績をあげ法学士（コロン

（ヒア大学）、法学博士（イニール大学）の学位を獲得したが、帰国してかけた目標は、立憲政治の確立とともに、弁護士としての地位向上、私学の発展であった。弁護士として名声をあげ、財政困難な東京専門学校には身銭を切ることを惜しまなかった。

明治一三年八月に東京大学法学部講師となった鳩山が、大学卒業式の演説で人材教育に文部省、大蔵省が熱心でないとして烈しく非難して大蔵卿の佐野常民を驚かせ、一五年一月に講師を解任された。鳩山は少しも騒がず弁護士を開業し、屈することなく平然としていた。一八年に鳩山を外務省に迎え、取調局長、翻訳局長に取り立てたのは外務卿、外務大臣の井上馨であった。それを追いかけるように文部大臣の森有礼から説得され、鳩山は一九年四月に法科大学教授兼任を承諾した。二〇年三月に兼任を辞退したにもかかわらず、二〇年九月から外務大臣を兼任した伊藤博文は、鳩山を説得して法科大学教授、教頭を兼任させた。当時は帝国大学総長が名目的に法科大学長を兼ねていたから、法科大学教頭は法科大学長とみなしてよかった。井上や伊藤の恩顧を受けたにもかかわらず、鳩山は伊藤に代わって二二年二月から外務大臣となった大隈重信に傾いていった。明治三三年に伊藤博文が政友会を組織しようとしたとき、伊藤は鳩山に憲政本党を去って参加することを求めたが、鳩山は自由党と改進黨が争い、憲政党と憲政本党が争ったのは愚劣であり、大政党を作って藩閥に対抗しなければ立憲政治は実現しないと論じ、伊藤と大隈との提携を切望して

やまなかった。落ち目の憲政本党とともに、名声の振るわない大隈を救いたかったのである。

三四年一〇月にイニール大学は創立二百年祭を挙行し、伊藤博文、鳩山和夫を招待して名誉博士の称号を授与した。鳩山夫妻はたまたま伊藤博文と同じ宿舎に泊まりあわせて歓談した。大隈夫妻が鳩山和夫を後継者として厚遇してはいないし信頼できる人物でないといふ伊藤が忠告したのに応じて、自信満々の鳩山春子は和夫に代わって陳弁しただけでなく、伊藤が大隈と協力して桂太郎内閣に当たらねば藩閥と官僚の専制政治は改まらないと反撃した。自信満々であっただけに、のちに大隈に裏切られたと悟ったときの鳩山春子は悲憤の抑えようもなかった。三九年から四〇年にかけて療養していた鳩山に、何の前触れもなく早稲田大学（東京専門学校は三五年に早稲田大学と改称されたが、大学令による大学となったのは大正九年から）の改革が通達された。すなわち校長の鳩山は解任され、大隈重信を総長として高田早苗（天野為之とともに一五年に東京大学文学部を卒業、改進黨の発足、東京専門学校創立に参加）を学長とする体制が四月から発足したのである。すでに憲政本党をまとめる能力を失っていた大隈は、憲政本党総理を辞任し政界から引退することを四〇年一月の党大会で宣言したが、同情し慰留しようとするものは現われなかった。大隈を見限ることのできない人々は、負けず嫌いで弁説好きの大隈を総長に祭りあげ多彩ないわゆる文明運動を展開したのであった。

憲政本党にあいそをつかした鳩山は四一年一月に脱党して政友会に入党し要職を占めるようになった。西園寺公望内閣（第二次）が四四年八月に発足したが、それに先立って副総理格の原敬は鳩山を訪れた。すでにガンの症状は進んでおり、積極的な協力を求めるわけにいかなかった。ついに大臣になることなく鳩山は他界した。政治家としての大隈の遺産を継承して、総裁となり総理大臣となったのは古参黨員ではなくて官僚出身の加藤高明であった。鳩山より四歳ほど年少の加藤は東京大学法学部で鳩山の講義を聞き、明治一四年に首席で卒業して三菱本社に入った。ヨーロッパ留学のち岩崎弥太郎の長女と結婚し、二〇年に外務省に入り、翌年外務大臣となった大隈の秘書官となり政務課長を兼任した。ついで松方正義（大隈大臣）の秘書官となり、大隈に殉じて外務省を退こうとする鳩山を慰留して果たせなかった。三三年一〇月に伊藤博文が結成されてまもない政友会（憲政本党から尾崎行雄が移ったが、前述したように鳩山は動かなかった）を踏まえて組閣したとき、加藤高明が外務大臣に抜擢された。

四四年二月に病死した松井直吉は、一四年に東京大学理理学部の教授となり、一八年に工芸学部に移じ、さらに一九年に工科大学に移った。二六年に農科大学が設けられると教授兼学長として迎えられた。帝国大学を鳩山が去り古市が去ったのちも留まり、生涯を辛抱よく大学人として生きぬいた。しかも日露戦争の講和にあたって戸水事件が起こり、望まずして総長に任命され、後だ

たきに耐えねばならなかった。すなわち三八年八月に政府の軟弱外交を弾劾した論文を発表して法科大学の戸水克人教授が休職処分になれ、法科大学教授会が処分は言論の圧迫であり権力の濫用であると断定し、大学の自治、学問の自由を叫んで久保田譲（文部大臣）に激しく抗議し、全学を揺がし京都帝国大学にも波及する騒動に発展していった。

九月になって戸水は金井延、寺尾亨、岡田朝太郎、建部運吉、中村進午と連署して、講和条約批准の拒絶を求める上奏文を奉呈した。総理大臣の桂太郎は激怒し、総長の山川健次郎を依頼免職の処分にした。代わって総長に任命されたのが農科大学長の松井直吉で、たちまちに山川、戸水の復讐と松井の辞任を求める運動が燃えあがった。法科大学を皮切りに教授全員の辞表が次々に提出されていった。総長経験者の浜尾新、菊池大麓などが奔走し、やがて久保田の辞任、松井の辞任（代わって浜尾新が再び総長に就任）、戸水の復職で落着くこととなった。この間に桂太郎に代わって西園寺公望が組閣し、いわゆる桂閣時代が始まった。法科大学の教授たちは幾度も軟弱外交に悲憤慷慨して、立憲政治の確立という重大な課題を見のがしがちであった。つかの間の総長を勤めた松井ほど、孤立無援の悲哀を味わった大学人がまたあったであろうか。かつて古市が工科大学教授兼学長を辞任したとき、浜尾は執拗に慰留した。いざという場合に古市を総長なり、文部大臣なりにするため、大学にとどめておきたかったのである。

大学を去って久しい古市は松井の苦境をしみじみと想いやりながら、柔よく剛を制する菊池武夫が法科大学をあくまでおぼれ、教授たちの顔ぶれも違っており、文部省との衝突も起こらなかつたと考えるのであった。

斎藤修一郎とともにボストン大学に留学した菊池武夫は、司法省に入り、司法卿、司法大臣の山田顕義から深く信頼された。明治二〇年に法科大学教頭の穂積陳重が辞任したとき、菊池は鳩山とともに後任候補にあげられた。鳩山が外務省を主務として教授兼教頭を兼ねることとなり鳩山は菊池に講師として授業担任を求めた。菊池は快よく内諾し、伝えきいた学生も歎んだが、上司の山田は許さず手許から離そうとしなかつた。二一年には鳩山、穂積とともに最初の法学博士となった。シベリア鉄道の起工式に列席しようとして来日したロシアの皇太子が、二四年五月に大津で警官に斬りつけられるという事件がおこった。明治一六年一二月から司法省をあずかって疲れきっていた山田は、青木周蔵（外務大臣）につづいて西郷従道（内務大臣）とともに引責辞職した。菊池（民事局長）は山田に殉じて退官し、弁護士を開業した。まもなく山田も西郷も枢密顧問官に任ぜられたが山田の健康ははかばかしくなく、二五年十一月に生野鉾山視察の宿舎で病没した。山田は吉田松陰、大村益次郎から山県有朋よりも大きく期待され、戊申戦争（東北戦争）、西南戦争にも従軍して陸軍中將となったが、司法省に移ってフランス法学者を督励して法典整備にいそし

むようになった。四八歳で仆れ、ついに山田の功労は十分に報いられることなく、勤勉で誠実な菊池がいつも身辺にあったことが、せめてもの幸福といえようか。古市は一五年八月に内務卿であった山田に従って北海道の豊平川水害を視察した（つづいて一七年九月まで改修工事を現地地を担当することになる）。山田は三八歳、古市は二八歳の働きざかり、談論風流、意気投合したことを憶はずにいられた（かつて山田は函館周辺で榎本武揚の軍勢と戦っており、北海道の山河は古市にとっても忘れ難いものとなった）。

菊池はふたたび官途につくことなく、弁護士地位向上と私学の発展に邁進した。鳩山のように政界に進出しなかつたから、それだけ精進して成果をあげることができた。明治一八年に創立された英吉利法律学校に菊池は穂積陳重、岡村輝彦とともに参加した。同校は東京法学院、東京法学院大学、中央大学と改称されるが、菊池は二四年に東京法学院院長に選出されてから没年に至るまで、院長、学長として校務にはげんでいる。それは慶応大学における福沢諭吉、早稲田大学における大隈重信と肩を並べて、私学の歴史に特記すべき業績ではなからうか。古市も東京仏学校、和仏法律学校（法政大学の前身）、工手学校（工学院大学の前身）の創設、運営に尽力したが、菊池のように没頭することはできなかった。なお二四年には菊池は勸選議員として貴族院に議席を与えられ、古市とは心おきなく談笑する機会も恵まれた。菊池は藩

主であった南部家の乱れがちな財政にも参与したが、その心くぼりには目付役の原敬、東条英教も叩頭するほかはなかつた。古市の曾祖父も祖父も江戸詰の藩主側近で、藩内の尊皇倒幕派から敵視され、藩主も維新によって交替を余儀なくされたから、菊池の果たした役目を古市は背負うには及ばなかつた。よくはげむと英照皇太后が感心した古市の能楽にしても、酒井家ゆかりの流派ではなかつた。

穏やかな菊池武夫の後を追うように、激しい長谷川芳之助が世を去った。長谷川は英語化学科の生徒でつねに首席をしめ、留學生選抜で初めて首席を松井直吉にゆずった。松井、長谷川、南部はそろってコロンビア大学に留学したが、化学科を修めたのは松井だけで、長谷川は南部とともに鉾山学科を選んだ。こつこつと鉾山学の研究、実習にいそしんだ南部に対し、長谷川はコロンビア大学を卒業したものの、政治学、経済学を究めると称してドイツへ出かけた。これは留學生監督の目賀田種太郎の指導に従わない行為であり、文部省が容認するわけはなく、古市がパリ大学で政治学・経済学を聴講したようにはいかなかった。長谷川は明治一三年に帰国して、かねて意気投合していた豊川良平の紹介で三菱本社に入社した。東京大学理理学部の講師（採鉱冶金学）にという動きもあったが、欧米の製鉄事業を調べてきた長谷川は国家のために製鉄所を建設せねばならぬと決心していたので、応じようとしなかつた。鉾業を興さねばならない、特に製鉄なしに国家の

将来はない、政府がやらないなら財力のある三菱にやらせようと考えていたのである。そのころ高島炭鉱の経営で苦しんでいる後藤象二郎が政治家として将来を過まらぬようにと心配して、福沢諭吉が岩崎弥太郎に働きかけ、高島炭鉱が三菱に譲渡されることになった。長谷川は高島炭鉱の技師長となって九州に赴任した。一六年に長谷川は吉岡鉾山に移り、一九一年に三菱本社の鉾業部長となり東京に転居した。南部は一四年に三菱本社に入社して高島炭鉱に配属され、やがて九州各地の炭鉱を監督するようになる（二九一年に鉾業部長となり、四三年に管事となり、大正五年に三菱を退社するまで業務に専心した）。

もともと政治すぎの長谷川は、性格的に南部と合わず、技術者の枠を逸脱しがちであった。上京した長谷川は杉浦重剛、小村寿太郎と國事を論じ、しばしば血気にはやるのであった。小村は外務大臣としての井上馨、大隈重信の識見、手腕に失望しており、特に大隈のすすめた条約改正構想は黙過できず、國家の体面を汚す軟弱外交なりとする杉浦、長谷川の大隈弾劾運動を陰から支えたのであった。長谷川はしばしば岩崎弥太郎に製鉄所創設を説いたが成功せず、弥太郎の仆れたあとを継いだ弥之助に会いそをつかして二六年に三菱を退社した。それからは炭鉱の経営、指導に携わりながら、國營の製鉄所建設に情熱をそそぐようになる。政府が二六年に臨時製鉄事業調査委員会（委員長は農商務次官の斎藤修一郎）を、二八年に製鉄事業調査会（委員長は農商務次官の

金子堅太郎)を、また三五年に製鉄事業調査委員会(委員長は吉市公威)を設けたときに、長谷川は委員として参加し熱弁を振るっている。あるときは製鉄について技術の権威者として、あるときは国家を憂える国士として、奮声を張りあげた。そのころはまた政府の外交は軟弱なりとして対露同志会を結成して、開戦に賭みきれと叫びつづけたのであった。ここでは杉浦を動かして「日本」、「東京朝日新聞」三六年八月一八日に掲載させた「満洲問題の経済的方面」なる論文を紹介しておく。

満洲問題ニ関シテハ輿論既ニ定リ居リテ我國捕獲利ノ維持上無止ハ最後ノ手段トシテ武力ニ訴フルヲ辞セザルノ点ニ於テハ一ノ輿論者ナキモノ、如シト雖トモ言行上大責任ヲ有スルノ士ニシテ戦争ノ経済社会ニ与フル影響ト戦費ノ二項ニ関シテハ明晰ナル判断ヲ欠キ杞憂ヲ抱クモノ往々之レナキニシモ非ラズ從テ問題ノ解決上遲延ニ流レ一定ノ方針ヲ透徹スル上ニ緩急程度ヲ過リ速ニハ不測ノ憂ヲ醸スル虞ナキニ非ラス依テ余ハ右ノ二方面ヨリ此問題ヲ研究シテ披瀝ヲ試ミント欲ス。

抑、世界ニ列立スル國々ニシテ歴史的其他ノ事情ヨリ各其地位、資質、性質ヲ異ニセルハ尚個人間ニ天賦及ビ境遇ヨリシテ其差別アルガ如ク而シテ又各々長所アリ短所アリ今日世界ノ舞台ニ於テ勢力ノ競争ヲナスニ當リ英米ノ如キハ商人算盤ヲ以テ其勢力ヲ擴張ノ先鋒トナリ政府ハ漸ク後ヨリ武力ヲ以テ其声援ヲナスニ過ギズ、独逸ノ如キハ稍々速ヲ異ニシ政府ハ商人ヲ指導シ勢力ノ擴張ヲ率先籌画シ算盤剣戟並行ノ觀アリ、露國ノ如キハ政府自ら商人ニシテ剣戟ヲ一手ニ兼用シ進退スルノ形ヲアリ、コレ皆國ノ性質上長所短所ノ差異アルノ然ラシムル所ニシテ長ズル点ヲ利用シ軌道ヲ異ニスルナリ、我邦未ダ商業國ニ非ラス其長所ハ

思ヒ至ランコトヲ望ムナリ、努力ノ不足ヲ一般経済界ニ感ゼザルノ点ニツイテハ余前ニコレヲ論ゼリ戦備品ノ供給ニ付テハ數年間戦争継続スルモノトスルモ今陸海軍ニ於テ準備既ニナルモノノ外ニ要スル戦備品ハ殆ンド總テ國內ニ於テ製造シ得ラルベシ其内是非他國ヨリ輸入ヲ仰ガザルヲ得サルモノハ硝石、上等鋼鉄其他少量ノ特製専売品位ニ止マルベシ如斯ク研究シ米レハ戦費ノ九割五分(既決定ノ海軍拡張費ヲ別ニス)迄ハ日本又ハ日本人ノ手ニ落ル金錢ナルコトヲ知ルベキナリ、一部ノ日本人ヨリ支出シテ一部ノ日本人ニ落ル金錢ナリ、即チ右ノ手ヨリ出シ左ノ手ニ取ルモノナリ、コノ事業タルヤ一個人一会社ノ仕事トハ大ニ經濟上趣キテ異ニシ舉國一致即チ國家ノ大事業タルコトヲ心底ニ區別シ置キ國家ノ懐ヲ大觀スレバ金錢ノ總額ニ於テハ増減ヲ見ルナシ夫レ中央ニ吸取スルノ手段手続キニ至リテハ一時借金、預金奨励、臨時増税、公債発行等種々ノ方法ヲ機ニ應シテ採ルベキナリ、貨幣集散機關ノ要其大ニ発達シタル今日ナレバ俗ニ所謂ナキ袖ハフレネ其前ニモ陳フル如ク有ル袖ノ事ナレバ其レヲノ方法ハ平常トハ違ヒ非國一致ノ上ナレバ種々アルベシ紙幣増発ハ我國人ノ腦中迷信ノモノアリテ其發言ヲサニ蛇蝎視スルノ習慣ナリト雖トモ必要ノ場合ニハ紙幣増発モ決シテ忌ムベキモノニ非ラズ昔仏戦争ノ際ニハ仏國ノ如キ城キニ紙幣増発ノ慘苦ヲ嘗メ居タル國ナルニ係ハラス七億五千萬円(拾八億フランク)ノ紙幣ヲ一時ニ増發シテ其弊害ヲ受ケザリシノミナラス政略時機ニ適シ大ニ繁榮ノ効ヲ奏シ仏國ハ紙幣ニ失敗シ又紙幣ニ成功シタリトノ美談ヲ有スル如キ敢テ迷信的ニ忌ム如キハ愚ト云フベキナリ。

今我國ニ於ル正貨準備ハ老債五千万円ニシテ未タ會テナキ最高額ナリ英國ノ參值万圓爲國ノ六億万圓ニ比較シ彼我ノ國柄生計ノ程度等ニ對照スレハ正貨準備ノ点ニ於テハ比較的ニ遙カニ優等ノ余裕ヲ有シ居ルヲ見ルベシ明治廿七年ノ役ニ際シテモ如斯キ準備ハ有セザリシニ加ニ今日ニ於テハ信用ノ応用及ビ貨幣集散機關ノ具備同日ノ論ニ非ラズ如斯ク分析

世界無比ノ万世一系ノ皇統、忠勇ナル陸海軍、地形歴史ニ依リテ養成セラレタル愛國心ノ充實ナリ軍ニ商業ノミヲ以テ争ハシカ商人ニモ一歩ヲ譲ラザル所以ナリ、世間ノ論者國力ノ發展ヲ講ズルニ當リ所謂平和の膨脹ト稱シ英米ノ軌道ヲ學ハントシ商人ノ無氣力附阿斐ナキヲ責ム、コレ眞レノ甚シキモノニシテ我長所ヲ捨テ、我ノ短所タル所ノ他ノ長所ヲ眞似ントスルモノナリ、須ク我カ長所ノ存スル所ヲ研究シテ一國ノ方針ヲ定ムヘキナリ、今や宇内ノ形勢退守ヲ許サズ退縮ハ自滅ナリ進ンデ始メテ守ルコトヲ得ル耳、此時ニ當リテ純然ナル平和の膨脹ハ望マンキモ我邦ノ性質地位未ダ之ヲ許サズ同力ノ發展ヲ計ルニハ只劍戟算盤並行ノ政略アル耳、如斯ク分析シ米レハ滿洲問題解決ハ軍ニ國威ヲ宣揚スルノ謂ノミニ非ラス同力ノ發展則チ我邦ニ取り經濟的発達ノ道行タルヲ知ルヘシ。

抑、戦争ニ要スルモノハ人口ノ繁殖ハ我國ノ名物ナリ、毎年五十万人ノ増加トス其内半分則チ二十五万人ハ男性ナリ、故ニ毎年十乃至二十万人ヲ失フモノ人口ニ減少モ米サス又一國ノ製産力モ毫モ影響セザル耳ナラズ常ニ遊民充満セル國柄ナルヲ以テ戦争ノ方面ニ充分ノ努力ヲ引去ルモ努力不足ノ為メソ以テ經濟界ニ不振ヲ來タスノ恐れアラサルベシ、蓋シ人気が興廢ハ止ムベカラサルガ故ニ戦争ト云フ声ノ爲メニ危惧不安心ヨリ、時的異状ハ或ハ免レザルベキモ此戦争タルヤ國權國利發展ノ道行則チ武力應用ノ商業タルヲ自覚スルニ至レハ反テ人氣ノ勃興ヲ見ルニ至ルヘシ。

戦費ニ関シテハ英國ノ南征討ニ英大ナル額(或拾四億圓)ヲ要セン等ノ例ヲ引キ我國力能ク其重キニ耐フル能ハザラン乎ノ杞憂ヲ抱ク者ナキニ非ラザルガ如シ、コハ簿記方ノ杞憂ニシテ經濟ノ元理ニ一歩過リテ研究スレハソノ杞憂ハ露散スルニ至ルヘシ、戦費ヲ論ズルニ當リ論者莫大ナル金錢ノ支出ヲバドモ余ハ一歩ヲ進メテ其ノ先行即チ散布先キニ

シ米レハ戦費ノ点ニ付テハ憂フルニ足ラサルヲ見ルベシ。

二項ノ断案如斯クナル以上ハ今日我國ノ取ルベキ方針ハ既ニ明瞭ナリ、今や我長所ヲ大ニ利用スルニ千載一遇ノ好機會ナリ、劍戟算盤並行ノ國是ヲ遂行スル上ニハ天祐トシテ歡迎奮起スベシ、名正シク利多シ漫ニ老成者矣ヲ街ヒ千載一遇ノ機ヲ逸スルナカレ。

この論文は多くの識者から法科大学の教授たちを圧倒する愛國の文章として受けとめられた。

長谷川芳之助、齋藤修一郎は日露戦争の講和会議が終ったとき、小村寿太郎が国民の要望を果たせなかつたと言つたとき、外務大臣を辭職せよと強要した。齋藤が杉浦重剛を訪ね、いっしょに押しかけて辭職させようと言つたが、杉浦は小村を越える能力を誰がもっているか、いずれ小村には總理大臣をやつてもらいたいと言つて拒否した。さらに小村こそは一身を顧みず國家の將來しか眼中にない國士であると力説したので、齋藤は氣勢をそがれて退散した。長谷川は杉浦の制止をきかず、その後も攻撃しつづけた。かつて對露同志会を結成して騒いだように、對韓同志会を結成して日韓併合の強行を迫った。小村が再び、明治四一年八月二七日から四三年八月三日にかけて外務大臣となつたが、小村の對米政策は許せないと言ふのであつた。小村が体力つきて辭任し絶命したのは四三年十一月二六日のことであつた。小村が去つてから、長谷川の氣力もだんだんに衰えていった。製鉄事業については、

古市は辛抱がよく長谷川をかばって発言の機会を与えた。すぐにとりたがる長谷川の蛮行、奇行に多くの友人は辟易したが、古市は柔軟な態度を失うことなく包みこんで、長谷川ならではの役割を見つけてやろうとした。長谷川は唐津藩の貧進生ではなく、少しおかれて大学南校にやってきたが、たちまちに英語生徒のなかで頭角をあらわし、仏語生徒を代表する古市に議論を吹っかけてきた。想えば長い交友であった。

長谷川の病死で、豪傑は全て消え去った、豪傑の時代は終わった、古市は考えこむのであった（なお南部球吾は鉾山事業で、原口要、平井晴二郎は鉄道事業で、重資を元気に背負いつづけたが、豪傑ぶったりはしなかった）。古市自身は、いつのころからか、豪傑ではなくなっていた。明治三十二年七月に主務（内務省の土木技監兼土木局長）をも、兼務（東京帝国大学工科大学の教授兼学長）をも退任したときも、初代の満鉄総裁になれとのすすめを断って三九年六月に韓国統管府鉄道管理局長官に就任したときも、四〇年六月に鉄道管理局長官を辞任して帰国したときも、古市は豪傑らしくないと豪傑たちは首をかしげた。退くことなく進むことのみを考えがちな豪傑たちには、すでに早くから古市の出処進退はしばしば判りにくいものとなっていた。そのときどきに、古市がどのように考えていたかを、これから探ってゆきたい。